

〔実践報告〕

定住を希望する外国人生活者向けマネープラン教材の開発と試用

大 和 啓 子・渡 部 真由美・結 城 恵

要 旨

生活者として日本へ定住することを希望する外国人がライフプランを構想する際に必要となる情報、たとえば税金、保険、年金等の制度、金融機関の利用法などを理解するための地域日本語教室用教材を作成した。本稿では、教材作成の背景事情を説明するとともに、マネープランと日本語教育それぞれの専門家の協働による作成の過程、また、作成した教材の構成および内容について報告する。そして、地域日本語教室での試用を経て明らかになった本教材開発の意義及び改善点についても述べる。

【キーワード】生活者としての外国人、マネープラン、地域日本語教育、教材開発、情報保障

1. 教材開発の背景

群馬県の在留外国人登録者数は平成24年12月末現在、41,181人に上り、県の総人口の2%を上回っている。(法務省在留外国人統計による。なお同時期の日本の総人口に占める在留外国人数の割合は1.6%)。群馬県で実施された群馬県定住外国人実態調査(平成22年度)では、69.9%の外国人住民が「今後も日本に住み続けたい」(平成18年度は36.3%)、また、その80%が「今と同じ地域に住み続けたい」と回答しており、現住地域での定住意向の高まりがみられる。さらに、50歳以上の外国人住民数の割合も平成14年の9.1%から、平成24年には15.7%とその割合は高まってきており、在留期間の長期化と高齢化が徐々に進行しているといえる(法務省在留外国人統計)。

しかしながら、これらの外国人住民には、日本での暮らしに必要な情報が十分には届いてないことも群馬県定住外国人実態調査(平成22年度)から見て取れる。「医療(病院、予防接種等)」については、64.4%、「福祉(健康保険、年金等)」については61.3%の外国人住民が情報入手に困難を感じている。一方で、79.7%の人が日本語を学びたいと回答しており、日本語学習意欲は高いことがうかがえる。

松尾ほか(2013)で指摘されるように情報保障は社会参加の土台であり、情報がきちんと確保されなければ社会から隔離排除されてしまう。このような事情を背景として、定住を希望する外国人が日

本に長く安心して住み続けるために役立つ日本語教室、「あなたの『ライフプラン』をつくり・実践するための日本語教室」を実施することとなった。この取り組みは、文化庁平成25年度「『生活者としての外国人』のための日本語教育事業」地域日本語教育実践プログラム（A）採択事業、群馬大学「日本に定住を希望する外国人住民が高齢期に向けて備える「ライフ・プラン」に必要な日本語教育実践プログラム」（企画・運営責任者 結城恵）の一環として行われたものである。外国人住民たちに関心の高い日本語教育を通して、高齢期を迎える前に、ライフプランを立て、実践できる能力を養成するための取り組みである。

今回、地域日本語教室のフィールドとした伊勢崎市には9,984人と県内最大の外国人登録者が在住している。（群馬県調べ、平成24年12月末現在。）また、50歳以上の外国人人口の割合も16.7%に上り（伊勢崎市統計調査、平成25年12月）、生活者として日本に暮らす外国人たちが、高齢期に備える「ライフプラン」を学ぶ要請が高い地域であった。

本プログラムにおけるライフプランは、①マネープラン（健康保険・税金・年金）②ケアプラン（生活習慣病・介護保険）③地域交流プラン（弓道を通じた地域住民との交流）の3つのプランから構成され、それぞれの専門知識やキャリアを持つ地域人材と日本語教育専門家とが協働して日本語教材の開発から日本語教室の実施までを行った。本稿では、この「あなたの『ライフプラン』をつくり・実践するための日本語教室」のための学習教材のうちのマネープラン教材の開発について報告する^{注1}。

2 教材開発の体制と手順

2. 1. 教材作成に先立って

教材開発を開始するにあたっては、教材の使用者を想定する必要がある。まず、本事業では、日本語教室を開催する伊勢崎市において、参加者を募集した^{注2}。その方法としては、公的機関や店などにチラシを配置したほか学校などを通じ外国人保護者への配布を行った。また、フィリピン・コミュニティ、ベトナム・コミュニティ、南米（ブラジル・ペルー）・コミュニティのリーダーへの周知依頼も行った。その際には「老後困らないようにお金のことを勉強するための日本語教室である」と伝えた。

そうした呼びかけに対して、地域に暮らす外国人たちの関心は高く、特にフィリピン・コミュニティでは、歳の離れた配偶者がいるなどの理由から、将来、どれくらいの費用が必要なのかを具体的に知りたいという者や、収入がどうなるのかを気にしている者、本国に送金しているため少しでも節約方法を知りたいという者もいた。また、特にペルーやブラジルなどの若い世代の人たちからは、これから日本でお金を貯めていくことを想定して勉強しておきたいという声が聞かれた。

日本語のレベルについては、基本的なひらがな、カタカナの読み書きができ、日常の一般的な会話はできるレベルを想定した。そのため、初学者向けの日本語教育を望んでいたベトナム・コミュニ

ティーの参加希望者は今回のマネープラン教材の対象からは外さざるを得なかった。

2. 2. 教材開発体制

日本語教室への参加希望者からのヒアリングで得られた情報を念頭に置きながら、マネープランの教材は、CFP® 認定ファイナンシャルプランナー大谷明氏と、日本語教育を担当する本稿筆者の渡部、大和（以下日本語教育専門家）の3人で開発を進めた。大谷氏は群馬大学・群馬県「多文化共生推進士」養成ユニットの履修生の一員であり（教材開発当時）、多文化共生への見識も兼ね備えた地域人材である^{注3}。

具体的な教材の作成は以下のようにすすめた。

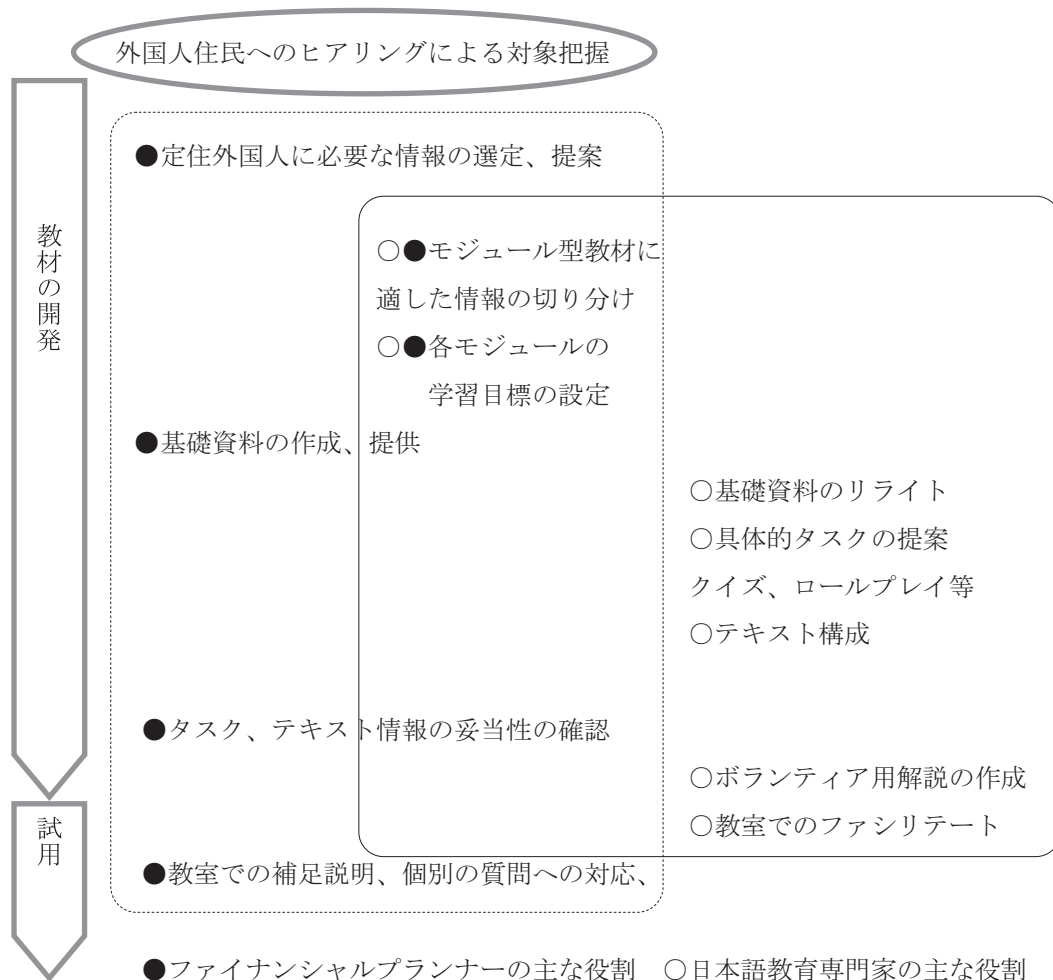


図1 開発の体制とおおまかな流れ

まず、ファイナンシャルプランナーから、定住外国人に有用なマネープランに関する情報の一覧の

提示がなされた。これを日本語教育専門家と共に、日本語教室の実施回数と時間配分、学習者の負担を考慮し、1回完結のモジュール型教材とするために、情報をどのように切り分けることが可能か議論を重ねた。切り分けに際しては、1回ごとに2つ～3つの学習目標を設定することとした（詳細は4. 1. 表3）。1回毎の内容を決めた後は、ファイナンシャルプランナーからの当該情報と資料の提供を受け、日本語教育専門家が資料を外国人にわかりやすいことばでリライトした。その際日本ファイナンシャル・プランナーズ協会が発行する『FPが答えるくらしとお金のQ&A』（2012）、『夢をかなえるくらしとお金のワークブック』（2012）を主に参照した。また、タスクやクイズ、ロールプレイなど様々な方法で実践的に学ぶ工夫を日本語教育専門家が提案し、ファイナンシャルプランナーの見地から、タスクなどによって示される情報の妥当性と学習目標からの逸脱がないか検討を行ったうえで、執筆をすすめた。

また、学習目的の確認、関連話題での会話、キーワードの発音や、モジュールごとのふりかえりを入れるなどのテキスト構成については、日本語教育専門家が主導的に行った。

さらに日本語教育専門家は、教室で日本人ボランティアがテキストをスムーズに扱えるよう、補足情報を書き込んだボランティア用テキストを作成した。

そして、日本語教室での試用場面では、外国人との直接のやりとりは主にボランティアに任せ、日本語教育専門家が全体をファシリテートし、ファイナンシャルプランナーは補足説明や個別のケースへの対応を行った。

以上のように、ライフプランニングや税金、年金などの制度、金融機関の活用方法などのファイナンシャルプランナーの専門知識と、その説明に用いる日本語の理解のしやすさやボランティアと共に学べる工夫、知識定着への配慮といった日本語教育専門家の知見とを互いに活かしながら協働的に作業を進めた。

3. 教材開発の基本方針

ここでは、地域日本語教室で使用することを目的に作られた既存の素材集・教材の分析を踏まえ、筆者らの開発した教材の基本的な開発方針及びその意義について述べる。

3. 1. 本教材の特徴

本教材の位置付けを岡崎（1989）の記述を参照しつつ紹介する。日本語教材について述べた岡崎（1989）は、初級のレベルで取り上げる複合シラバスとして、「課題」「話題」「一般習得」「情意」「異文化」の五つのシラバスを紹介している（表1）。

表1 複合シラバス 岡崎 (1989)

シラバスの種類		実生活との関わり
課題	課題を軸とした活動を行うための教材。外で食事をする、病院で治療を受ける、タクシーに乗るなど、を軸とした活動を行う教材。	学習者の実生活に根ざしたニーズに基づく
話題	話題を主軸とした活動を行うための教材。自己、家族、自分の部屋についてなど。	学習者の実生活に根ざしたニーズに基づく
一般習得	言葉を何らかの活動の中で使うことが最も言語習得をすすめるという考え方に沿って、何らかの意味で言葉を自然なコミュニケーションの中で使わせるための活動を産みだすものを指す。	特に実生活に結びつかない
情意	自己について表現したい、あるいは同じクラスの他人について知りたいという欲求を実現するのに言葉を通して行う様々の活動。	言及なし
異文化	一つは日本語を学習する外国人にとって異文化である日本文化を紹介するもの、あるいは学習者の母国文化と対比させて日本文化との相違点を明らかにするもの、第2は学習者それぞれがもっている母国文化に関する情報をお互いに交換し合うもの。	言及なし

岡崎 (1989) の「課題」で扱う項目は、機能シラバスと呼ばれることが多いが、ここで取り上げる項目は、例えば誘う、謝る、事実を述べるなど一般に言われる機能シラバスよりも、場面がより具体的で、日常生活上の課題を果たすものである。しばしば言語行動場面といわれる「言語を使って実生活上の課題を成し遂げる場面」でなされているという意味での課題である。

今回開発した「あなたの『ライフプラン』をつくり・実践するための日本語教室」のための学習教材 (マネープラン) は、「積立預金の口座を開設する」、「年金窓口で相談する」など場面が具体的で、日常生活上の課題を果たすものであるという点では「課題シラバス」にあたる。一方で、お金 (マネー) に関するテーマについて、日本語での説明を読み、聞き、話し、活動しながら日本語を使うという意味では「一般習得シラバス」に、税金や年金など日本での仕組みや制度を紹介する上で母国の状況を適宜挙げてもらいながら進めるという点では「異文化シラバス」の側面も兼ね備えているといえる。

またシラバスについては、「モジュール式」と、「積み上げ式」という分類方法もある。本教材は、各回の内容が独立したモジュール式 (遠藤2008)^{註4}を採用した。その理由は、地域日本語教室という特性上、学習者が毎回出席するとは限らず、一度欠席すると学習内容がわからなくなり、その後の活動に参加しづらくなるという事態を避けたいと思ったためである。

3. 2. 既存の地域日本語教室教材との比較

これまで留学生を対象にした日本語教材は、『みんなの日本語』、『文化初級日本語』など前の課で学んだ内容に知識を積み上げていく「積み上げ式」のものが多かった。これは、留学生の場合、毎回授業に出席することを前提としているためだと思われる。一方、日本在住の外国人生活者を対象とし

た教材では、「モジュール式」のものが開発されてきている。その理由は、文化庁（2004）を引用する形で遠藤（2008）が指摘するように、外国人参加者が教室に毎回参加するとは限らないためだと思われる。各回の内容が独立した「モジュール式」テキストであれば、学習者のニーズに合わせて必要な課のみを選んで扱うという使い方が可能である。

以下の表に、日本在住の外国人生活者を対象とした教材地域日本語教材の概要をマネー教材と比較する形でまとめる（表2）。

表2 地域日本語教材と本教材の特徴

教材名	発行、発行年	モジュール	特 徴
『かけはしー生活、交流、学習のための素材一』	前橋市国際交流協会、2006	○	日常生活に必要な日本語と地域に密着した情報をふんだんに取り入れた地域密着型のテキストである。 大きく13の生活場面を扱っている。 交流の話題やタスクが豊富である。
『越中とやまのよく効く日本語 しゃべらんまいけー地域ボランティア日本語教室のための活動集一』	トヤマ・ヤポニカ、2007	○	外国人や日本人地域住民の視点に立った「もっと生活をおもしろく」「トラブル解決」「災害対策」という3つの面から活動を選び、トピックや会話を出している。 大きく10のテーマを扱っている。 巻末に「困ったときの相談先」（電話番号、使用可能言語）が掲載されている。
『まつえりあ』	『松江地域事情小冊子（仮題）』企画編集委員会、2007	○	在住外国人向けの地域文化事情の読み教材である。松江での生活について地域の方々と語り合うための交流の道具となることを目指している。 大きく23のテーマを扱っている。
『話してみらんね さしより！熊本弁』	熊本県立大学日本語研究室、2009	○	熊本方言らしく聞こえる表現、文型、言い方をまとめている。 導入用会話例（4コマ漫画）、聞き取り練習用会話例、表現の簡単な説明、簡単な練習、応用練習を1まとまりから3まとまりで一つの課が構成されている。 「質問する」、「誘う・断る」など全7課からなっている。
「あなたの『ライフプラン』をつくり・実践するための日本語教室」のための学習教材	群馬大学、2014	○	日本で高齢期をあたえるにあたって必要なお金に関する知識を取り上げたテキストである。 テーマによっては、近隣地域にある相談窓口の住所や電話番号等の情報を掲載している。 大きく8つのテーマを扱っている。

この表を見ると、多くのテキストでは地域に密着したテーマを広く扱っているのに対し、マネー教材は、日本在住外国人の生活の中で必要になる情報のうち、お金に関するテーマに特化している点が

特徴である。外国人が生活する中で、生活とお金は切り離せないテーマであり、また、人々の日本永住傾向が高まるにつれ、高齢期に向けて長期的な視野でお金の使い方や貯蓄等について考える必要が出てくる。その意味で、日本に長期滞在する外国人に対してお金に関する情報を提供することは、情報保障（松尾ほか2013）を行うことにつながるといえる。

4. 教材概要

4. 1. 教材の内容と構成

マネープラン教材の内容を以下の表3にまとめる。

表3

回 ^{注5}	教材タイトル（テーマ）	目 標
第1回	「ライフプラン」これからの人生を考える	ライフプランを作成し、今後の人生で必要なお金を知る
第3回	イベントのために貯金する	貯金のことわかる 積立預金口座を作ることができる
第4回	給与明細を見よう	税金のことわかる 「給与明細」に何が書いてあるかわかる（ほか）
第5回	困ったときのお金（健康保険と雇用保険）	健康保険のことわかる 雇用保険のことわかる 困ったとき相談するところわかる
第6回	年をとったときのためのお金（年金）	年金のことわかる 年金窓口で相談することができる
第7回	税金（源泉徴収、年末調整、確定申告）	（日本のお正月について知る） 源泉徴収、年末調整、確定申告のことわかる
第8回	お金のトラブルにあわないために	お金のトラブル（問題）について知る 困ったとき相談するところわかる
第9回	家計と資産運用	家計をチェックする 預金の利息について知る 金融商品について知る

想定する学習者は、各回で扱うテーマにある程度の興味関心がある日本語非母語話者である。各テーマについては、基本的な内容のみを抜粋して掲載するように努め、より詳しい説明や個別的な事例については、ニーズに応じて専門家が補足説明をすることを前提に作られている。

4. 2.

各回の教材は、おおむね以下の①～⑧の内容を含んだ構成となっている。第3回「イベントのために貯金する」の回のテキストを抜粋して紹介する。

①学習目標

きょうの もくひょう

1. ちょきん のこと が わかる
2. つみたてよきん こうぎを つくることが できる

②テーマに関する関連質問

(3) ゆうびんきょくや ぎんこうに 「こうぎ (Account、口座)」が
ありますか。



③テーマに関する仕組や制度の紹介

【つみたてよきん (積立預金)】



- 3ねん、5ねん、10ねんあとの もくひょう (Goal, Wish) のため、
まいつき (every month) おなじおかね (fixed amount of money) を
【つみたてよきん】こうぎに ちょきんします (save money)。

④テーマに関連する会話練習

◆  はなす れんしゅうを しまししょう




ぎんこうの まどぐち で

「つみたてよきん、おねがいします」




⑤理解を確認するクイズ

◆ クイズ 

【ふつうよきん】?? 【ていきよきん】??

【つみたてよきん】??

どれが いい?

1 まいにち たべものを かります 

【ふつう】 【ていき】 【つみたて】

⑥テーマに関する語彙 (日本語・母語)

おかね	お金
ちょきんする	貯金する
ぎんこう	銀行
こうざ	口座

	英語	スペイン語	ポルトガル語
おかね	Money	dinero	dinheiro
ちょきんします	Save money	Ahorrar	economizar dinheiro
ぎんこう	Bank	Banco	Banco
こうざ	Account	cuenta	conta

⑦ふりかえり

きょうの にほんごきょうしつは どうでしたか。

ひとりずつかんそうを いってみましょう。

「きょうの こうざは、 _____ です。」

れい：きょうの こうざは、おもしろかったです。／おずかしかったです。

ちょきんが すこし／よく わかりました。

⑧補足配布資料：テーマに関する母語資料 (自治体作成資料など)

テキストは、学習者の日本語力を考慮し、やさしい日本語で書かれている。できるだけ短い単文を用いるようにしているが、内容によっては、複文を使わざるを得ない場合もある。表記に関しては、学習者の読み書き能力を考慮し、すべてひらがな表記となっている。学習者に知ってほしい漢字については、ひらがな語彙のあとに括弧書きで漢字表記を併記した。各回の冒頭では、学習者がテーマに関する具体的なイメージを抱きやすいように、イラストや写真、テーマに関する関連質問や既有知識を問う QA 等が設けられている。テーマによっては、母国での制度や仕組みについて尋ねる質問が含まれる場合もある。テーマで必要な会話の練習が含まれる回では、その回で学習した語彙や言い回しを

用いてロールプレイ等を行う。テーマに関するキーワードには、母語訳リストをつけた。基本的に学習者の日本語力は問わないが、日本語力が低い場合は、通訳による解説を必要とする。

テーマに関する母語資料は、インターネット上に掲載されているもので、日本全国の国際交流協会等が作成したものである。母語資料は日本語の文を翻訳したもので、図などは含まれていない。

また、教材は、「学習者用」と「ボランティア用」があり、「ボランティア用」は「学習者用」に指導上の留意点や解答例を記したものである。

5. ボランティア養成講座の実施

2013年9月～10月、日本語教室の実施に先立ち、日本語教室で外国人の学習サポートを担うボランティアの養成を目的とした講座を全5回にわたって行った。今回の日本語教室教材の内容は、マネーという特定の分野に特化した内容であるという特徴から、日本人にとっても日常的に身近な内容ばかりでなく、将来あるいは場合によって必要となるような、より踏み込んだ専門知識も少なからず含まれる。まずはボランティアがそのような教材内容に対する理解を深め、自信をもって教室で学習サポートができるよう、ライフプランについて知る活動や、マネーの知識に関する資料をやさしい日本語を使ってリライトする体験、言葉を覚えるための活動の方法などを紹介した。

この講座を受けた後に日本語教室に参加したボランティアからは、やさしい日本語という考え方やタスク活動の経験が実際の学習サポートをする場面で役立ったとの感想が聞かれた。

6. 教材の検証

6. 1. 教室の様子

2013年11月～2014年2月に実施した「あなたの『ライフプラン』をつくり・実践するための日本語教室」で作成した教材を実際に使用した様子とその結果明らかになったことについて述べる。教室開始前には、その日に出席するボランティアに対して、15分程度かけて教材の内容と進め方の紹介を行った。日本語教室に参加する日本語学習者の日本語力はさまざま、教材の内容や活動を理解するのに通訳が必要という者から、通訳を介さず日本語で言いたいことを自由に述べられる者までいた。そのため、マネープラン日本語教室では、日本語学習者とボランティアがほぼマンツーマンで、日本語力に応じて通訳が補助に入り進めたが、単調になりがちだという声がボランティアおよび学習者から挙がったため、教室に設置したスクリーンの大画面にテキストを映し出して、テキストのどの部分を扱っているのかわかるようにし、適宜キーワードや図を教材作成者である日本語教育専門家あるいはファイナンシャルプランナーが板書しながら進めるようにした。各回の日本語教室の終わりには、学習者には母語か日本語でポートフォリオを記述してもらい、ボランティアにも教室の感想を記してもらった。さらにボランティアとともに毎回反省会を行った。

具体的な教室の様子について、「第6回 年をとったときのためのお金（年金）」を取り上げ、報告する。この回は、1つ目の目標が「年金のことがわかる」、2つ目の目標が「年金窓口で相談することができる」である。まず、1つ目の目標に関連して「定年」ということばを取り上げ、日本と母国において何歳が定年か、定年後にどんなお金が必要かについて話し合った。その後、「年金」ということばの意味を確認し、年をとってからの生活費を払うのは自分か、家族か、国かについて、日本と母国の状況について皆で話した。さらに、「年金制度」について、まず母国の制度について知っていることを挙げてもらった上で、日本の制度を確認した。そして、ここまで内容の確認を目的に、「年金クイズ」を行った。次に、2つ目の目標に関連して、年金についての相談窓口の確認をし、実際に年金相談をする会話をロールプレイ形式で行った。教材は、年金についての質問、クイズ、ロールプレイと、知識を確認する活動を随所を含め、少しずつ知識を深められるように作成した。

また、学習者の様子については以下のものであった。日本語力が高く、両親が年金を受給する年齢であるなど年金についての予備知識がある者は、非常に積極的に取り組んでいた。反対に、日本語の語彙力が低くまた母国での年金についても知識がない者は、自由に発話するのが難しく、通訳を介しても具体的なイメージがわからない様子だった。テキストにない補足的な内容になるとついていけないようだったが、年金クイズ、ロールプレイは、参加できていた。特に最後のロールプレイでは、年金支払いについて2名の外国人のケースを教材の中で図を用いて提示したため、それぞれの状況が理解でき、補足説明をすることなしにスムーズに会話練習に進んだ。ロールプレイの様子から、年金支払いのためには最低25年の支払いが必要で、受給給年齢が65歳からであるという最低限の事柄について、年金についての知識がなかった学習者も理解できていることがわかった。

試用を通し、教材が母国や日本での年金知識が多少でもあることを前提とした内容になってしまっていたことに気が付いた。また教材に含まれる説明部分については、イラストや図を多く取り入れ、文で説明する場合にもできる限りやさしい日本語を用いるように努めたつもりだったが、結果的には学習者の理解が難しいレベルの日本語による説明が多くなってしまっていた。

6. 2. 考察

開発した教材の試用を経て、シラバス、構成および、内容の面から考察を行う。

①シラバス

日常生活上の課題を果たす「課題シラバス」の側面については、各回の冒頭で関連質問を行い、各回の終わりには日常生活上に関連したクイズ等を設けたことで、その日の到達目標が学習者に伝わりやすかったのではないと思われる。母国の制度等を挙げてもらいながら進める「異文化シラバス」の側面については、成人してからは日本での生活の方が長く、そもそも母国の仕組みや制度をよく知らない学習者には十分に機能したとは言えない。日本語を使いながら習得を進める「一般習得シラバス」の側面については、教材が与える知識に非常に高度なものが含まれていたため、学習者の日本語力で処理できる範囲を超えてしまったという反省がある。また今回はマネーについて、「貯金」や

「年金」などプライバシーに関わるテーマであったため、自己について表現したい、教室にいる他の人について知りたいという「情意シラバス」の側面を前面に出しづらかった。今後、改訂する場合には、学習者の日常を語るような対話素材を埋め込むことで、知識注入に偏らない進め方ができるのではないかと思われる。

②構成

次に、教材の構成については、テーマや説明に関連するイラストや写真を多用したことは学習者の理解促進につながった。テーマに関する関連質問やクイズは、学習者の既有知識を活性化させ、教室活動を進めるファシリテーターやボランティア側が学習者の理解度を把握するのに役立った。テーマに関する仕組みや制度の紹介については、これまでも述べてきたように、やさしい日本語を用いるように努めたものの、内容を詳細に紹介したことにより、日本語の単文だけでは説明することができず、学習者の日本語力を上回る説明となる場合が多々あった。ただし、テーマで必要な会話練習については、その回の学習内容のまとめとなるもので、到達目標を学習者に明確に伝え、必要な表現等を使う機会を提供できた。テーマに関する語彙とその母語訳については、教室活動を進める中で、理解が困難な語が出たときに適宜参照した。適宜配布したテーマに関する母語資料は、母語の文章で説明がしてあるものの、説明されている制度自体を知らない学習者にとってはどれだけ助けになったか疑問である。

③内容

内容に関しては、日本で高齢期をあたえるにあたって必要なお金に関する知識を重点的に取り上げた。全部で8つのテーマを1テーマ1～2時間かけて進めた。重要な事項を抜粋して紹介しようと努めたものの、専門的な事柄に踏み込みすぎたという反省がある。日常生活に馴染みの薄い内容も含まれていたため、「やさしい日本語だけで進めるのが大変難しかった」という声が出席したボランティアからも挙がった。そのため、知識と日本語力のどちらも十分ではない学習者にとっては理解が難しい部分が多く含まれることになった。お金について何となく勉強したい、もっと豊かな生活をしたいなどという漠然とした動機で参加した学習者にとっては理解のハードルが高い内容であったといえる。一部の学習者からは、「(例えば帰国する場合や障害者が行う手続きなど)特別なケースに行う手続きがよくわからなかった」という感想が挙がった。教室では、内容を補足するため、ファイナンシャルプランナーが適宜、説明の補足になる図を板書した。内容に関する知識・日本語力ともに十分でない学習者にとっては、やさしい日本語だけでの説明よりも仕組み等を図で示した方が、理解が進むようであった。

7. 今後に向けて

今回開発した教材は、外国人のための情報保障という観点から、以下のような意義があったと考える。それは、日本で生活していくうえで重要な情報でありながら、従来外国人にわかりやすく提供さ

れることが少なかったマネープランに関する情報を集約し、できる限り理解しやすく示したということである。例えば、「年金」を例に挙げると外国人向けの情報として、日本語の制度を説明した文書を母語に翻訳した資料は入手可能である。しかし、母語に翻訳した資料を見た外国人がその内容をどの程度理解できるかは疑問である。本当の意味で、役立つ情報を提供するためには、できるだけわかりやすい形と方法で、情報を抜粋してまとめることが必要になる。その意味で、地域日本語ボランティアとの対話を通じて既有知識の確認をしつつ、やさしい日本語、イラスト、図を用いながら、情報を提供するという形式の本教材は、一つのモデルケースとなり得ると考える。

一方、改善点としては、できる限り基本的な内容のみをとりあげて心をかけたものの、専門家の観点から必要と思われる情報を選定していった結果、一般には馴染みの薄い事項も多く含み全体的に教材の理解の難易度が上がってしまった点が挙げられる。これについては、外国人が日本で生活する上で最低限知っておくべき情報をさらに厳選し、さらに深く知りたい場合、情報をどこで得られるかというような情報源の提示にとどめてもよかったかもしれない。あるいは、教材のレイアウトを工夫し、最低限知っておくべき内容と、さらに踏み込んだ内容や個別的な事例とが一見して区別できるようにすることで、学習者やボランティアにとってより扱いやすい教材になるであろう。さらに、教材中に目次、わかりやすい見出し、索引をつけることで、学習者のニーズに応じて、知りたい内容だけを探して参照するという使い方も有効だと思われる。

また今回、教材の試用段階においては、マネーの専門家が常駐していたことにより、制度の説明の際に図示しながら解説を加えたり、個別の質問に対応したりできるという大変恵まれた環境にあったが、マネーの専門家が出席しない日本語教室で用いる場合には、ボランティアが学習者の相談内容に応じて、専門機関や相談窓口を紹介することが必要だろう。そうすることで、本教材が外国人定住者にとっての情報保障の入り口としての役割を果たすことができると思われる。

これまでに明らかになった問題点を踏まえ、本教材をたたき台として日本語教室等で試用を重ね、改訂していくことで、他地域でも利用可能な教材となると開発者としては考えている。

注1) 今回作成した教材及び事業概要については、文化庁の生活者のための日本語教育事業、地域日本語教育実践プログラム (A) のホームページの以下の URL からダウンロードが可能である。http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/kyouiku/seikatsusya/h25/nihongo_program_a.html

注2) 伊勢崎市における日本語教室参加募集およびヒアリングは群馬大学・群馬県「多文化共生推進士」養成ユニットにより行われた。

注3) この事業は、平成21年度に、文部科学省「社会システム改革と研究開発の一体的推進 (旧科学技術戦略推進費)」に「地域再生人材創出拠点の形成」事業として採択を受けた事業である。

注4) 地域日本語活動用素材集の作成について実践報告をした遠藤 (2008) は、日本生活者である在住外国人のために、生活場面を題材とした支援を切り口として、そこから交流が生まれるような教材・素材集の提案の必要性を提唱し、モジュール形式の採用も検討に値すると述べている。

注5) ライフプラン日本語教室は、全11回で構成され、参加者は各自の興味に応じて「マネープラン」と「ケア (介護) プラン」に分かれて受講した。第2回、第10回は「地域交流プラン」として弓道体験を実施し、最終回は参加

者全員でふりかえりの活動を行った。

参考文献

- 遠藤知佐 (2008) 「地域日本語活動用素材集の作成と検証—外国人住民への生活行動支援と参加者間の交流促進に向けて—」『日本語教育』pp.62-71、日本語教育学会
- 岡崎敏雄 (1989) 『日本語教育の教材』アルク
- 国際交流基金 (2008) 『日本語教授法シリーズ14教材開発』
- 文化庁編 (2004) 『地域日本語学習支援の充実—共に育む地域社会の構築に向けて—』国立印刷局
- 松尾慎ほか (2013) 「社会参加のための情報保障と「わかりやすい日本語」—外国人、ろう者・難聴者、知的障害者への情報保障の個別課題と共通性—」『社会言語科学』16-1、pp.22-38
- 山本達之・松田みゆき (2007) 「生涯学習者としての日本語ボランティアが地域の大学に期待するもの—松江地域事情に密着した日本語地域教材冊子の開発—」『島根大学生涯学習教育センター研究紀要』第6号、pp.1-14.
- 山本達之・松田みゆき (2009) 「地域文化事情読み教材『まつえりあ』の開発と評価—松江地域の特色ある多文化共生社会の構築を目指した試みの一つとして—」『島根大学生涯学習教育センター研究紀要』第6号、pp.1-14
- 吉里さち子・嵐洋子・大庭理恵子・大山浩美・甲斐朋子・田川恭織・馬場良二 (2013) 「地域社会により順応するための方言教材」の開発—教材開発のプロセスとロールプレイ談話の結果を中心に—」『日本語教育方法研究会誌 Vol.20 No.2、pp.8-9

参考資料

- 庵功雄監修、岩田一成・森篤嗣編 (2010,2011) 『にほんごこれだけ！1、2』ココ出版
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級I、II本冊』
- 日本ファイナンシャル・プランナーズ協会 (2012) 『FPが答えるくらしとお金のQ & A』
- 日本ファイナンシャル・プランナーズ協会 (2012) 『夢をかなえるくらしとお金のワークブック』
- 文化外国語専門学校 (2008) 『新文化初級日本語I、II』

Development of Japanese Language Materials concerning Financial Planning for Foreigners wanting to settle in Japan

YAMATO Akiko, WATANABE Mayumi, YUKI Megumi

In Gunma Prefecture, there are foreigners wanting to settle in Japan as a member of the local community, but they have inadequate information on prospects concerning their old age. Therefore, we developed Japanese language materials for local Japanese volunteer class. These materials provide information about financial planning such as the system of tax, pension, and insurance. Herein, we report the development process and the outline of the materials made by a financial planner and Japanese language education specialists.